

『起止録』解説 - 2 -

文久2年

江森 一郎

金沢学院大学教授

1 はじめに

先行解説と先行翻刻文、文久2年分（今回）の「登場人物一覧」、「年表」等について

この解説は、『金沢大学文化財学研究 9』（2007. 3）所載の『起止録』解説 1、『起止録』（安政2年）に続くものであるが、我々はこの間に、『起止録』解説（嘉永2年）、『起止録』嘉永2年<1月～6月翻刻、7月～12月翻刻>『金沢大学教育学部紀要 教育科学編』（第57号 2008. 2 所載）も公開した。ここでの解説は、既発表の解説や注釈を前提としている。この年の分のみでも十分に参考になると思うが、起止録全体に関心のある方は、できればそれらとの併読をお願いしたい。それらのすべては、いずれ金沢大学図書館デポジトリで公開予定であるが、その内、『金沢大学教育学部紀要 教育科学編』第57号 2008. 2 所載分は、すでに公開されている（<http://hdl.handle.net/2297/9625>）。

なお、今回の「登場人物一覧」では多数の与力身分の年齢が確定できる史料をみつけたので、可能な場合はそれに基づき、文久2年当時の年齢を計算して表示した。ちなみに、文久2年当時の著者・中村豫卿の年齢は40歳で3人の子持ちになっている（後述のように、次女をこの年の10月3日に亡くすが）。豫卿の両親はすでに亡くなっており、中村豫卿家は、現代の核家族と同じ構成である。また、年表は「読む年表」を心がけてみた。なるべく多様な記事を取り上げるように心がけたので、起止録そのもののイメージがより描きやすいかと思われる。また、解釈が難しい部分が多くあり、解釈間違いもあるだろうが、このような形が原文解説の手がかりとして役立つ事を期待したい。

2 文久2（1862）年とそれにいたる時代情況

1) 全国情勢

文久2年になると全国の政治情勢は旧来の秩序が崩れ、混沌としてくる。この年は、地理的に政治の中心から遠い加賀藩が幕末の情勢の急激な展開に対応できない状況が顕著になりはじめる年ともいえよう。この頃の政治情勢は複雑で変化は激しい。以下では、まず文久2年に至るまでの時代状況を概観しておきたい。

嘉永6（1853）年の黒船来航の圧力で安政元（1854）年3月には幕府は日米和親条約を結んだ。この時に決まった領事駐留の規定により、安政3（1856）年7月にはハリスが下田にやってくる。ハリスに強いられた通商条約締結に対する勅許が得られぬまま京都から帰った失意の老中堀田正睦に代わり政権を掌握した井伊直弼は、苦渋の決断ではあったが、安政5（1858）年6月日米通商条約を孝明天皇の

「勅許」をえないまま結んでしまう。これにより、幕府は天皇の承認を得ないで国家の重要事項を決めてしまったとし、尊皇攘夷の志士の運動が高揚するが（しかし、無碍に西欧列強の要求をはねつけた場合、当時の中国におけるように日本の植民地化のような事態が生じる危険性が十分あった事は、今ではよく知られている）、それには厳刑をもって臨んだ。いわゆる同年8月27日から始まる「安政の大獄」である。将軍・家定の危篤、喪中であつたが、その中での出来事である。その結果、多数の公家、大名、家老からその配下が重い処分を受けた。若き先覚者橋本左内、吉田松陰が死罪となり、刑死したのも、この時である。

井伊の強行策に力で対抗しようとした一部の志士は、安政7（1860）年3月3日くなお、この年3月18日万延と改元＞江戸城の桜田門外で井伊直弼暗殺事件を起こす。幕府の最高権力者である大老が、江戸城門前で暗殺されるという事態は、天下に幕府のいかに権威が落ちてしまったかを知らせる意味を持った。その失墜した権威を天皇家と将軍家の姻戚関係をつくる事で回復しようとしたのが公武合体政策であり、幕府に強い批判を持っていた孝明天皇もこの頃にはこの政策に期待をもったと言われる。こうして、皇女和宮（孝明天皇の妹）の14代将軍家茂との結婚計画が進められた。

しかし、このような為政者の懸命の努力にもかかわらず、文久元（1861）年に至ると、京都を中心とした政情は、混沌状態をいわばさらに複数化させることとなる。外様雄藩の打開策の一番手として、長州藩は、時代の主導権を握るべく、藩主の強い支援を受けた重臣・長井雅楽守が多く臣下を率いて事態打開のため「航海遠略策」を掲げて京都に派遣されることになる。しかし、様々な思惑が渦巻く情勢のなかでこの計画も挫折し、政情はいよいよ混乱を深める。文久2年1月15日には、また水戸浪士による「坂下門外の変」が起こされ、公武合体を進めた老中・安藤信正が襲われ負傷し、4月には辞任する事になる。4月23日には京都に進軍してきた事実上の薩摩藩主・島津久光は、薩摩藩急進派を中心とした志士の暴発を抑えようとした寺田屋事件を起こす。6名が斬殺、2名が重傷、自刃した。他方で12月12日には、攘夷派の長州藩の高杉晋作らは、品川御殿山に建設中の英公使館を焼き打ちする。

幕府の方では同年7月4日これまで禁じていた諸藩による艦船の購入を許し、また、閏8月22日には、藩主の参勤交代制を三年に一度、しかも三ヶ月の在府に緩和し、妻子の帰国を許した。この背景には、参勤交代には膨大な経費がかかることがあり、諸藩の財政負担軽減の意味があつたが、この措置は、家康以来の幕藩体制の屋台骨（大名の妻子を江戸に置く事を義務付け、人質の意味を持たせるという制度）が崩れる事を、幕府自らが認めた事でもあつた。

なお、安政6（1859）年5月28日に神奈川、長崎、函館の自由貿易許可が布告されて以降、世界貿易圏に日本が急速に巻き込まれ、日本の物価高が急速に進んだと言われている。開国前の嘉永元（1848）年は米1石が丁度銀100匁だったが、万延元（1860）年には146.5匁、文久元（1861）年には、221.1匁となった。開国前と比べ物価が2倍以上に跳ね上がった。この時代の政治危機の背景には、このような開国により急激に進行した物価高による生活の窮迫があつたことは言うまでもない。ただし、通商開始直後の国内の急速なインフレ状態は、実は貿易以前の、当時の日本と欧米の金、銀の交換レート

違いを悪用した欧米商人の荒稼ぎに由来していた。その事は、初版で新田次郎賞受賞となった歴史小説、佐藤雅美『大君の通貨 幕末円ドル戦争』（文春文庫）に分かりやすく描かれている。

2) 加賀藩の情況

加賀藩のこの年の変化・施策をみると以下の通りである。

この年(文久2年)の7月勤王派藩士・豊島安三郎^{テシマ}の士風振起の上書があり、8月25日には鶴来出身町医の子で勤皇の志士・小川幸三による郡奉行に対する上書もあった。小川の上書は、京都の情勢急迫から「加賀藩でも藩侯の上京が必要」とし、それを促したものである。小川幸三の上書は、年寄りたちに示され、閏8月2日には屏風で囲われた状態でおこなうという前近代的な方法ではあったが、ついに藩主・斉泰に小川が直接話せる機会が持たれた。その後、諸頭役を集めて話を聞かせる機会もつくられたが、諸頭たちの情勢認識の部分的進歩はあったかも知れないが、藩論を大きく旋回させる事はできなかった事は、おおよそ見当がつくと思うが、まさにそうであった(『石川県史』第貳編第四節「元治の変」参照)。

それでも加賀藩でも、文久2年9月27日には西洋の兵器の採用が命ぜられるという軍制上の大きな変化が現れるが、他方で「皇国の兵法を守る事」との抱き合わせだった事に致命的な時代認識の欠如が反映していると言えよう。すなわち兵制改革の重要性は、優れた西洋の軍事機器の導入の如何だけにあるのではなく、その前提の上で、欧米の機能的な近代兵法の採用が重要であり、それは戦国時代以来の身分制度の根幹として伝統的組織法、加賀藩で言えば、八家→人持→物頭→(平士→与力→)小頭→足輕というような身分の高下が軍事組織上の上下そのものであった組織それ自体の改革が必要だった。そういう組織の抜本的改革の必要性がどれだけ深く認識され、改革されたかが問題なのである(園田英弘『西洋化の構造 黒船・武士・国家』思文閣出版、1993)。この点からすると、加賀藩のこの時の改革は、時代の変化に対応する準備がほとんどできていなかったと言わざるを得ない。

なお、9月3日には、前述のようにこの年閏8月22日の「参勤交代制を三年に一度三ヶ月の在府に緩和し、妻子の帰国を許す」という幕令により、藩主や世子の夫人たちに江戸から「下国」するように命じている。同月29日には嗣子・慶寧も帰国の途につき10月11日には金沢に到着した。少し遅れたが、斉泰の夫人たちも10月19日に金沢に到着した。また、9月9日には、諸士の服制の簡素化が命ぜられた。11月10日には通用の小銭が払底し、次第に銭相場が上げられてゆくので、銀1匁につき丁100文などと公定相場を定めた(翻刻文のそれぞれの日の記事を参照、なお、公定相場の事は11月11日の記事にある)。また、この月、諸士の養子の条件を緩和した。60歳以上になればこれまでなるべく避ける事を原則とした他姓の養子をとることを認める事にした。流行病で次々と人々が死ぬ(後述)なかで、当主の急死による「お家断絶」の不安の緩和を目指した施策であろう。12月18日には、かねてから願っていた斉泰の將軍・家茂上洛への「供奉」が認められた。上洛するとなると混沌とした京都の情勢の理解を進めるため上記、小川幸三を登用することにして、翌文久3年正月9日その「縮」を解き、10日に「定番御徒並」に任じ、2月6日には京都に出発させる。なお、この小川幸三は、翌年元治元(1864)

年8月9日公事場に捉えられ、10月26日には「刎首」に処せられてしまう運命であったことは、加賀藩勤皇史上よく知られている。小川幸三は時代の激しい流れの中での犠牲者であった。

残念ながら、この年の起止録の記録自体には、このような日本全体や藩の動きを知る手がかりはほとんどない。ともあれ、この日記は起床の時刻から就寝の時刻まで何をし、誰と会ったかの記録である。

「何をし」、「誰と会った」かということについても趣味や教育、内職、自分の行った家事（家や庭の維持・修理）の場合は具体的に示すが、政治批判にかかわることは、ほとんど現れず、それらに対する自分の価値判断や感慨は、意図的に書かないようにしているとも考えられる。

一例をあげれば、閏8月15日の記事に、「西坂先生四十九日逮夜ニ付行中平、大嶋、永山平太、前後追々参着、同咄等、先生江戸道中之詩作并画等披見いたし等、夜五ツ時過ニ帰、寝」とあるが、この時、勤皇派の永山平太が加わっているのが注目される。政治情勢の話が出た可能性は高いと思われるが、起止録は全くその痕跡を残さない。なお永山平太は、この後の活動で幕末まで蟄居の処分を受ける西坂門の勤皇派の代表である。

3 武士と競争的環境について

1) 何が問題か

司馬遼太郎に「競争的原理の作動」（原載『太陽』1971.10 同『歴史の中の日本』＜中公文庫所収＞）という40年近く前に書かれた短文がある。マルクス主義歴史学の影響が未だ強かった時代に、「アジアの専制国家」と歴史家が言うとき「日本を除いて」という言葉を聴いたことがないという日本の歴史的特質についての注目すべき言及からはじまる。司馬は、「日本は古代から競争を重視し他のアジア国家とは違った体制を作ってきた」と、重要な指摘をしている。この中で司馬は、アジアの中で日本のみは早くから競争原理の優先が確立し、それ（競争原理）を阻害する強大な専制権力は築き得なかったとしている。

また、「要するに、競争の原理が日本の下層ではつねに作動し続けてきたということであり、いかに一時的に中国・朝鮮式の専制を輸入してもその原理を圧殺することができなかった」（文庫版、71p）と述べている。

普通、江戸時代は身分社会であり、競争原理はほとんど働かなかったかのようにイメージされている。そのイメージは『旧藩情』で江戸時代の武士社会の実態を分かりやすく描きだし、「門閥制度は親の仇でござる」を標語にした福沢諭吉の思想の影響が大きいように思われる。江戸時代は身分制社会であったが、武士も庶民も結婚・相続の際に相手の能力が重視され（能力が見込まれて婿養子をとることが多く）、結果的に能力主義が生きている面があった。ここでは、この問題を全面的に再検討するわけではないが、豫卿の属する与力身分のものが、自分の代の内に、あるいはその子どもの代に、平士になる例は非常に多いので、ここではその具体例をいくつか紹介し、加賀藩的な身分制度の実態に関係するので少し考察を加えてみたい。

2) 与力への登用と平士への道

再び引用となるが、大沢由也著・大沢徹校注『青雲の時代史-芥舟録・一明治人の私記』（文一総合出版、1978）は、金沢地域の文化史、社会史、教育史として貴重なものである。この中で加賀藩の与力身分の昇進制度について注目すべき記述がある。

幕末時代に於る武士階級は幕政三百年、泰平の余風を受け、上下安逸、皆其禄其職を世襲し、馬鹿でも阿呆でも男でさえあれば後目相続さし支えない時代であったのであるから、・・・
我が加賀藩に於いては、比較的中流の侍が各種の奉行となり、是等の職務を分担し、責任を負っていたのであるが、其实務は配属の与力などの下僚によって行われ、然も此与力組には相当な人物がいたのであるから、其調査判断は正鵠をえて、寧ろ正しい判断正しい政治が行われ、治安が維持されたと考えらるるのである。然らば何故に与力には人物が集まったかというに、与力の格式は元来お目見え以上に取立てらる特典があったから、当時一般武士階級の地位収入が数代釘付けとなり、安定不動より来りたる向上心の欠如に反し、独り与力のみは職務上の必要もあつたが、主として此特典があつたが為、各自智を研ぎ、学を講じ、向上心に満ちて居たのであると言わる。而して是等お目見え以上に拔擢せられた与力組の補充には、又七手組や人持組などの家人（陪臣、またもの）中より拔擢登用したのであると言わる。されば我等の父も此特典に浴したのである・・・（下線引用者、31～32頁）。

このように陪臣の子が与力に登用され、与力がその働きぶりで平士に登用される事が、少なくとも加賀藩では多く行われていたことは、彼らの由緒書を検討すると分かる。そのような例は、すでに前稿（『起止録、安政2解説』26～27p）でも早川数之助、音地左盛、坂井伊太、早崎清右衛門（信介）の例があることを指摘したが、ここでは、坂井権五郎（坂井伊太の実父）、板坂二衛門の例について少し詳しく紹介したい。

坂井権五郎

坂井権五郎の父・坂井宇衛門は、寛政11（1799）年11月2日前田内記与力に100石で召出された。同12年8月公事場御用加人となり、享和3（1803）年9月定役となった。文政7（1824）年10月22日30石加増され、同11年7月引退、同年12月2日死去した。その嫡子・権五郎は、父の公事場在職中の文化10年12月公事場留め書き役算用者に召抱えられ、文政12年8月相続が認められ、同時に定役となった。天保10（1839）年には、さらに30石引足（加増）され160石となり、弘化3（1846）年には本組与力とされ、嘉永4（1851）年2月には組外に任ぜられた。そして同5年9月には弓矢奉行当分加人、同6年4月には、同奉行本役となり、同年7月24日に亡くなった。この坂井権五郎の次男が、豫卿の同僚坂井宇衛門（祖父と同名）である。坂井権五郎の場合、公事場の定役を長年勤め、その過去の規定や記録の整理にも貢献し、その功績でまず30石の加増（与力の身分では正式には「引足」という）を受け、寄り親付与力から本組与力となり、引退直前に組外の平士身分に昇格し、弓矢奉行にまでなった。

板坂二衛門（板坂二郎大夫の父）

板坂二衛門は、寛政元(1789)年7月、今枝内記与力・植松平左衛門嫡子であったが、父の養方実叔父、本組与力・板坂弥三丞娘の末期養子となり、「遺知 50 石御加料知 50 石」の内何らかの理由で 40 石減らされて 60 石を相続する処から出発した。しかし、その後公事場で精力的に働き続けたらしく、文化 5(1808)年 12 月には 40 石加増され、天保 2(1831)年 2 月には更に 30 石加増された。さらに、同 9 年 12 月平士身分の組外に昇格され、普請会所道具奉行となり、同 14 年 7 月隠居した（板坂道雄由緒書）。

以上は、豫卿と関係深い人物（坂井宇衛門、板坂二郎大夫）の与力身分であった父親の 2 例を紹介したに過ぎないが、他にもこのような当時の出世の典型とも言える経歴を歩んだ人がまだまだ多いそうである。現代に比べれば出世のスピードは遅いといえは遅いが、一代の間に寄親付与力から本組与力に組替、その後家禄の 2、3 割～5 割をまず加増され、その後の働きで、さらに平士身分への抜擢がかなりの割合でありえたのである。

このような身分上昇が、与力身分のみにみられる現象なのか、平士にも似たような現象があるのか今後の更なる究明が必要だが、起止録を精査してゆくと、少なくとも、加賀藩与力身分には競争原理がかなり働いていたという事実を確認できるのである。

4 公事場勤務関連の事

1) 豫卿の職務の限定、この年の公事場

この年の起止録は 3 月 28 日から始まっている。この日豫卿は、「公事場付御用定役」に再任された。それが契機となって起止録が再開されたらしい。しかし、この時、席次（座列）は内藤誠左衛門の次と経験者の功績を認められた待遇のようであるが、他方で「当分検使御用先指除」と条件がつけられている。このような条件がなぜつけられたのか、どういう意味があったのか、知りたいところだが、今は推測の手段がない。ともあれ、約 6 ヶ月後の閏 8 月 26 日には、検使御用「指省」がなくなり検使役もするようになった。

この年の公事場をめぐる環境は、これまでの年に比べ、かなり多忙になっているように見える。事件の数が多くなっていることと、知行取りのれっきとした武士が何人もかかわる事件が起こり（内容は今のところ不明）、12 月 23 日には、公事場に「賊」まで侵入している。秩序が大きく揺らぐ時代になっている事は、この面からも察知される。

2) 公事場の人事異動

文久 2 年の公事場同僚の人事異動は、以下の通りであった。

8 月 30 日には北川亥之作年寄衆席執筆に、閏 8 月 18 日には、かつての教え子、水野金大夫が同僚となった。水野金大夫は、弘化 4(1847)年 7 月に入門した記録の残る水野金太郎 9 歳の成人後の名前と思われる。水野は、安政 5 年 7 月父死去のため遺知 120 石を相続した。その後いくつかの役職をつとめ、この年に公事場御用加人となったが、同年中にこの役を解かれ、文久 3(1863)年には今石動付与力にな

る。以後の事は省略するが、水野の公事場役人から早期の転役には、下記の事件（後述参照）が絡んでいたと推測される。

また、閏8月26日豫卿が再び検使御用を命ぜられた日だが、磯野助之進が割符才許に転役する。

11月7日には二宮銀三郎と有岡久米人が任ぜられた。

3) 平士、与力の事件

6月27日の記事に「六ツ半過ニ起、斎判江行、畑父子来あり、謡、難波津左衛門、千手七郎左衛門式番、五ツ半頃ニ帰、水野金大夫義ニ付、又斎判江暫行咄、帰」

閏8月18日に「水野金大夫是日同役被仰渡」の記事があり、その後たびたび他の新任者のように豫卿に何度も「聞合方」などを教えてもらいに来ている。

11月13日の日記に「七ツ半過ニ起、六ツ時前ニ役所江出、是日御馬廻組津田平丞十六ヶ條、同人養兄同右兵衛十一ヶ條、本組与力五十嵐辰次郎、横山蔵人与力酒井知大夫十二ヶ條、四人吟味有之、余、五十嵐拾八ヶ條主付・・・」

とある。馬廻りと与力2名が処分されたかなり大きなこの事件が、どのようなものであったか、興味深いものの、今のところこの事件に関する直接の史料はみつかっていない。しかし、編集方の残した『加賀藩資料（未整理分）万延元年-元治元年』に「横山蔵人与力酒井知大夫」の事件にかかわる史料の断片が残されている。

表題は、「病死人武家之一類江案内遅滞一件」とあり、以下の文章で始まっている（傍線引用者）。

与力坂井知大夫せがれ富松儀一類江御預之处、勤番人少ニ而差支候付河合富太郎等拾四人相加度旨紙面被差出承届右之内与力水野金大夫並に同人弟熊次郎齊藤判太夫行雲寺弟恵樂妙達寺並同寺先住且おち徳水之外夫々申渡候条金大夫等七人相加候様可被申渡候以上

文久二年一一月二三日

篠原織部殿

前田土佐守

この件は、事件そのものより、事件当事者の息子・富松を親類預かりにしたが、その親類がすでに死去しており、その事を事前に届け出ていなかったため生じた実際的な不都合の解消に関することであるようである。結局、事前に親類の死去の届けを関係部署に届けていなかった事から生じた不都合であり、今後このようなことがないように翌年1月29日に「頭寺役僧」に命じたとも別の史料に書かれている。

今の所この件にかかわる史料がこれ以上みつからないので、これ以上の推測は根拠がないが、水野は新任早々自己職務について具体的な要望を提出するなど、積極的過ぎる行動をしている。水野の早期の転任にはこの事がかかわっているかもしれない。

5 農民との接触、西坂先生の死

1) 七黒村五郎右衛門

小立野与力町から約 15 キロメートルほど離れた七黒（しちくろ、しちぐろ）村（現津幡町）の五郎右衛門が、この年「先達而より願一件」で何度も豫卿の自宅を訪ねている。以下に関係部分を抜書きする。

- 5 月 12 日 八ツ半過方七黒来、こほうすぐり草取等、跡二咄、晩二去、
- 8 月 27 日 五ツ半過二起、七黒五郎右衛門来咄、昼前二去、
- 10 月 6 日 七黒村五郎右衛門来咄去、
- 11 月 10 日 夜七黒五郎右衛門来、咄等、五ツ頃二去、寝、
- 12 月 7 日 昼頃方七黒村五郎右衛門来、同人先達而方願一件、昨日埒明由二而挨拶二来、
暫咄去、
- 12 月 29 日 七黒村五郎助来、咄、昼後去、

この頃加賀藩では、藩の役人に直接村の世話役などが接触することを禁じていたが、このように、地方の事件にかかわる件で豫卿に接触してきたことを隠すことなく（あるいは私的な日記なので漏れる危険を考えなかったのか）、結構詳細に記している。

2) 西坂成庵先生の死去

この年の 7 月 17 日に、西坂先生の麻疹を見舞いにゆく記事がある。22 日にも見舞いに行くが、8 月 2、3 日はすでに葬礼や「中陰逮夜」の記事になっている。なお、「中陰（ちゅういん）」とは人が亡くなってから 49 日間。一般に、死者の霊が次の生まれる場所が決定されるまでの期間を言う。「逮夜」とは亡くなった日から七日ごとに、閻魔大王を始めとする諸王に生前の善悪行に関して裁きを受け、各菩薩に教えを受け、七回目の七日（四十九日）に次に生まれ変わる世界が決まるのでその前に功德を積もうとする法要であり、いわゆる四十九日の法要を言う。葬儀の当日には西坂家から人がきて、豫卿に手伝いの依頼があり、駆けつけるが、その後は、閏 8 月 15 日には、「西坂先生四十九日逮夜」で弟子が集まった事くらいしか関係記事がない。この年は、豫卿が職業生活に入ってからすでに 12 年が経過している。かつては濃厚だった師弟関係も、この時期になるとあまり濃厚ではなくなっている感がある。

6 家族の日常、出来事（事件、子育て・教育、看病）、近所付き合い

結婚後しばらくして長男・民作が誕生し、長女・友（子）、次女・覚が誕生した。豫卿夫婦は 3 人の子の親となった。この年 10 月 3 日次女・覚を亡くすことになるが、それまでの妻の毎日は、祖父母を両方失い、有力な援助者がまったく同居していない幼児 3 人を抱えた内職の負担（後述）ということもあり、かなり厳しいものがあつたと推測される。次女覚の大病、死去の際の記事から姉（妹？）の大島稼亭夫人がよき協力者になっていた事もわかる。妻はこの約 3 年後の慶応 2(1866)年 5 月 1 日病死するが、この年の 9 月 10 日の記事のように子ども連れではあるが、観音院に参詣しているなどが、ほっと

する部分と言えようか。

なお、9月15日には、「四ツ時前^方丹羽誘、圪橋誘、皆連而宮腰堀内兵次跡江行、同所ニ而昼飯認等、間ニ米屋次右衛門江行、寸甫言付等、湯所菊見物等、五郎嶋江廻り、神主方之菊見物いたし、途ニ而日暮、夜六ツ半時頃ニ帰、寝」と「皆」とあるが、これは距離からして女子どもを連れて一日で帰れないとも思うが、舟などの利用があったのかもしれない。

1) 倅（せがれ）

この頃になると、豫卿は「せがれ」（せかれ）民作の教育にかなりかかわるようになる。民作は数えで10歳のはずである。4月5日に「せかれ素読、温習等致させ」とあり、閏8月23日には『蒙求』（中国の故事を四字句で連ねた漢文入門教科書）の復習をさせている。同10日、11日は連続して素読指導をしている。6月27日には「せかれ謡口移など」とあり、謡の初歩指導もはじめているようである。9月9日の「重陽」には、かねてから約束しており、丹羽椎溪と、倅を連れて土清水山（小立野台地の奥）あたりに遊行している。ただし、まだ足腰も弱いので民作はかなり草臥れたらしい。なお、7月1日には頼母子会場にも同道しているが、これは本人のためという意味ではないと思われる。9月19日はせがれに絵を描いてやっている。豫卿は、子どもの教育にかなりかかわっている。

2) 二人の娘

6月30日には「娘兩人麻疹」の記事が登場する。7月18日に「端丈吉来、先達而^方頼遣、豆口カ今日来ル、余并娘友診察いたし去」とある。「豆口」とは何か分からないが、牛痘のようなワクチンの一種かもしれないが、医学史の専門家に教えを請いたいところである。18日に「風邪難儀」であったが、このあと豫卿は「不快」が2日間以上続き、21日になってようやく全快している。しかし、この「豆口」の効果によるのか、豫卿と長女の「友」はこの麻疹とコレラと痘瘡の流行年に生き延びた。

次女の「覚」は10月1日には「下地斎竹力？」に診察をしてもらうが、翌々日3日には「暁八ツ時前ニお覚病死」となってしまう。さすがに死の前日の2日には「昼前ニ（職場から）帰」り、直ちに医師の端丈吉、小柳元洪へ行き、「紫雪」という薬を買って、「昼後ニ帰宅」して娘に飲ませたらしいし、すぐ医師兩人が駆けつけてくれる。しかし、「お覚」の病気に関する手当ては書かれている限りではこれですべてである。ただし、幼女の死亡であるが、親類縁者は多数駆けつけている。

3) 親戚のトラブル

金沢市立玉川図書館近世史料館に井口勝男の由緒書というものが残っている。これによれば、豫卿の祖父・井口三事の嫡子は井口久可であるが、その妻は板坂二郎大夫の妹である。その息子・井口久兵衛は、安政4(1857)年に「仔細有之」十石減知されたようだ(この時期の起止録は残念ながら存在しない)。何か重要な間違いを犯したようだ。豫卿が4月12日に板坂二郎大夫のところに行き、これも親戚の植松とともに「井口の事につき相談」したのは、板坂と親戚関係にあるからである。また、同じ12日に「お脇ま」が来て「申し入れ」をしている。したがって、問題の一方が「お脇ま」であることが分かる。6月28日には板坂の方から豫卿のところに来て、井口の件で相談している。7月17日には植松・板坂

兩人が来て「井口佐太右衛門」の件について相談している。他の重要そうな問題でもそうだが、簡潔な事実のメモの連続というこの日記から詳細を知るのは限度があるが、井口佐太右衛門の不祥事に関係して「お脇ま」が井口家から実家に帰る件がほぼ決着したようで、同 19 日から井口家の家財の処分など色々世話している。井口の財産処分で得た金で閏 8 月 10 日には板坂に慰謝料的な「銀子」を送り、「来月又指越簀」と記している。9 月 22 日に板坂へ「示談」に行っているのが、この事に関係していると思われる。10 月 12 日「板坂二郎大夫来、長談」とあるが、この事件に関係した話題であろう。この後は少なくともこの年には、この件の話題は記されていない。なお、ここでは井口久兵衛が井口佐太右衛門であることを前提としているが、実はその根拠がはっきりしない部分も残る。ただし、いずれにしても「お脇ま」の財産権がある程度確立していることが、この経緯からも推測できる。磯田道史『武士の家計簿』（新潮新書）は、加賀藩算用者を中心に江戸時代武士の生活実態を明らかにした画期的な書と思うが、この中で注目される論点が「江戸時代の武家女性が、考えられている以上に、自立した財産権を持っていたようである」（91 頁）という論点であろう。この点で「お脇ま」のこの事件のいきさつは、傍証程度にはなると思われる。

4) 隣家とのつきあい・・・斉藤判太夫一家

隣家の「斎判」との行き来がかなり頻繁なので、斉藤判太夫一家との関係を検証しておく。

斉藤判太夫が小立野与力町に居屋敷を拝領した時の文書が、たまたま残っている。これによれば、それは、天保 4(1833)年 2 月 6 日の事である。敷地は 160 歩 18 歩 1 尺 4 寸が「請地」と記されている。別の文献（『総与力』）によると同年 2 月 19 日に「召抱」となり、この時 22 歳であった。豫卿はこの時 11 歳であったから、斉藤判太夫は、11 歳も年長であったことが分かる。同年〇月 22 日には、寺社方修理裁許並びに〇〇廻道橋方用兼帯当分加人となる。同年 6 月 23 日に右を免ぜられる。同 13 年 5 月 23 日御奏者所留書御用加人となった。

その後、大分不明期間があり、この後の事になるが元治 2(1865)年 6 月から京都為御守衛御用、長州征伐参加、慶応〇年に壮猷館記録方御用在勤中病氣隠居を願い出て許された。

この年の「斎判」（斉藤判太夫）一家と豫卿のつきあいは極めて頻繁であり、家族ぐるみである。4 月 7 日の中村豫卿家の祭日には、斎判本人はもちろん、「斎判之奥様、御新造様」も参加している。6 月 5 日には嫡子・斉藤津左衛門が父とともにしばらく訪れ、謡を鑑賞する。嫡子・斉藤津左衛門は 5 月 2 日に江戸から帰ったとあるから、それから約一月後のことである。6 月 15 日には「昼後斎判江行、同人留守、津左衛門并松五郎与謡、寢覚津左衛門、草紙洗知左衛門、通小町津左衛門、猩々知左衛門」とある。父親が不在のところを上がりこんで二人の息子と謡会を行い、津左衛門も寢覚め、通小町を謡っている。翌 16 日には、斉藤津左衛門のほうから来て、謡四番も謡ってゆく。其の後も津左衛門との謡の交流はしばらく続く。「斎判」との交流はこの年は常に頻繁で、こういう濃いコミュニケーションが与力町のあちこちで展開されていた事が推測される。

なお、前稿でふれたように（『起止録、嘉永 2 解説』124 p）嘉永 2(1849)年 7 月 10 日に豫卿一家は、

「斎判」に自宅を銀子一貫目で売り払い、味噌蔵町に転居している。しかし、この後嘉永4年9月には新築した与力町のもとの地に帰った。

5) 流行病と医師たち

『石川県災異誌』によれば、文久2(1862)年は5月に「麻疹」が大流行し、8月には「コレラ」も大流行した。さらに起止録によれば、10月には痘瘡もはやっている。文久2年の金沢は、流行病の猛威に人々が怯えた時期でもあった。

麻疹は今日の「はしか」であるとされている。今日の医学による典型症例は、だいたい以下のようなものとされている。38℃前後の風邪症候群様(発熱、倦怠感、上気道炎症状)の症状や結膜炎症状が2～4日続き、いったん下熱する。発疹出現の1～2日前に、口腔粘膜の奥歯付近に、直径1mm程度の少し膨らんだ白色小斑点を生じる。いったん下熱するが、半日ほどで再び39～40℃の高熱が出現し(二峰性発熱)、発疹が出現する。発疹は体幹や顔面から目立ち始め、後に四肢の末梢にまで及ぶ。発疹は鮮紅色で、やや隆起している。特に体幹では癒合して体全体を覆うようになるが、一部には健常皮膚を残す。発熱・発疹のほか、咳・鼻汁もいっそう強くなり、下痢を伴うことも多い。口腔粘膜が荒れて痛みを伴う。これらの症状と高熱に伴う全身倦怠感のため、経口摂取は不良となり、特に乳幼児では脱水になりやすい。

発疹期は発疹出現後72時間程度持続する。これ以上長い発熱が続く場合には、細菌による二次感染の疑いがある。下熱後も咳は強く残るが徐々に改善してくる。回復期2日目ごろまでは感染力が残っているため、今日の学校保健法では、下熱後3日を経過するまでは出席停止の措置がとられるという。

また、8月下旬頃から金沢ではコレラが大流行した。コレラは、症状が非常に軽く1日数回の下痢をするだけで数日で回復する場合もあるが、通常、突然腹がごろごろ鳴り、水のような下痢と嘔吐が1日20～30回も起こる。下痢便には塩分が混じる。腹痛・発熱はなく、むしろ低体温となり、34度台にも下がる。急速に脱水症状が進み、血行障害、血圧低下、筋肉の痙攣、虚脱を起こし、死亡する。極度の脱水によって皮膚は乾燥「洗濯婦の手」、しわが寄り、「コレラ顔貌」と呼ばれる特有の老人様の顔になる。治療を行わなかった場合の死亡率は、アジア型では75～80パーセントに及ぶという。

藩ではコレラの流行の最中に閏8月9日より11日まで景気づけの意味もあったのか「送り出し」祭礼を命じ、ずいぶん賑わったというが(『加賀藩史料 幕末篇』上巻1264～65頁)、この時期の起止録には、その祭礼の様子はほとんど登場しない。年寄りや子供がどんどん死んでゆく様子が分かるのみである。豫卿はといえば、8月28日「疝痢」気味と記している。「疝痢」というのは下痢を伴う腹痛の意味で、コレラの症状と一致する。29日、30日の状況は悲惨で、ようやく回復の兆しが出るのは、閏8月1日である。しかし、体力があるから救われたのであろう。

痘瘡(疱瘡、天然痘)は、ジェンナーの種痘の発明(1796年)により、今日では絶滅したが、日本で普及したのは、嘉永2(1849)年以後である。金沢では、文久2年3月彦三に種痘所が設けられ、これが金沢大学医学部の創立起源とされている。痘瘡との日本の医師の闘いの歴史は、川村純一『病の克

服『日本痘瘡史』（思文閣出版）などに詳しいので省くが、幕末の日本ではこの闘いは大変な課題であった。

なお、文久頃の『加賀藩組分侍帳』（金沢文化協会編 昭和 12）や由緒書などにより『起止録』に登場する医師たちの概要を以下に記しておく。

堀昌庵（宗太郎）

文政 12(1829)年没の堀昌庵の娘婿、先代の堀昌庵は社会事業家として貧民のために昌庵町（現中村町）を創始した人として著名であった。嘉永 5 年召出し、十人扶持。安政 2 年 12 月家督相続。堤町後口に住んでいた。外科医。

端丈吉（晴貫）

端丈吉の住所は小立野与力町村方高岸寺とある。高岸寺とは宝円寺門前で与力町入り口にある小さな寺である。五人扶持でこの歳 36 歳であった。近所でもあり、多くの与力の家の家庭医的存在であったろう。なお、端は頼母子の仲間にもなっている。

上田玄伯

藩医ではないので同上侍帳に記載がないが、由緒書が残っている。これによると、代々町医者の家柄であったが、京都で修行し、小立野の大音（おおど）帯刀家<人持、4300 石、小立野>の医師（陪臣）として仕え、文久 2 年 8 月には引足知をえて、五人扶持となった。住居は小立野馬坂新町であり、端丈吉と同様近所に住んでいる医者である。

八十島権三郎（^{ショウアン}祥菴）

外科兼帯の 15 人扶持の藩医の末期養子（弘化元年）。町医者の子。万延元年 7 月 27 日江戸にて 5 人扶持を加えられた。彦三の四に住んでいた。

10 月 11 日から嫡子・民作が痘瘡になったが、この時は、玄伯が中心になり、端丈吉や八十島権三郎にもみてもらった事がわかる。従兄弟の井口佐太右衛門に高崎正親老人（詳細不明）を頼みにいってもらい診察してもらうなど、嫡子の痘瘡には最善の手をつくすといった趣がある。同 15 日には「行灯に赤紙張り等」と当時の痘瘡の一般的対処法が実践されている。19 日には「是夜せかれ指引有之」と発作がピークに達した。月末になると姉の友子にも感染したようである。以後は二人ともに医者世話になっている。ともあれ、11 月 1 日に「是日せかれ壺番湯引」とあり、ようやく難局を脱した。友子のその後の記録はないが、一命は取り留めた。

なお、これら文久 2 年に中村豫卿家が世話になる医師たちは、父が死去の際（嘉永 2<1849>年 5 月 17 日落命）世話になった医師とはほとんど重ならない。時間の推移もあるが、父の時は立派な藩医たち（森元俊 300 石、江間篁斎 200 石、黒川良安 130 石など）に頼んでいた（『起止録、嘉永 2 年 5 月翻刻文』参照）。どちらにしても、生死を分ける重病の場合、この頃は数名の医者に同時にかかるのが常態であったようだ。

8 月 23 日には「九つ時より湯茶煙草等一切禁制」のデマが広がった事に注目したい。体制を支える

下級役人（与力）の間にも一時的とはいえデマが広まったのは、伝染病の大流行に怯える世相を反映しているといえよう。閏8月5日にも再びデマが飛び交ったようである。

7 借金、内職と頼母子、同姓会

6月14日から17日には、「御取扱銀」願いの記事がある。9月22日には「地廻会所銀」、10月26日には「聖堂銀」の貸与や返却の事が出ている。「御取扱銀」の内容は不明だが、会所銀は参勤の際の手当てが足りない分を貸与する資金である。豫卿の場合のように「地廻」の仕事で借りられる場合もあったようだ。その受け取りを近所の中村他左衛門に頼んでいる。後者の「聖堂銀」は、幕府の聖堂維持のため毎年藩が負担する金額の貯蓄のため、藩士に一定の利子をつけて貸し出す金である。この場合は返済であったようだ。どちらにしても、豫卿の一家も借金しながらの自転車操業的な家計になっていたことが分かる。そこで、内職やきのか狩りや頼母子が頻繁に登場するのである。養蚕をはじめたのも、家計の窮迫と深い関係があるのだろう。7月28日に大島家の頼母子で豫卿が落札しているのも、その事を裏付ける。

内職（含む養蚕）

この年の「かやす（ず）あみ」（詳細不明）に関する記事を拾うと、以下の通りである。

- 4月14日 五ツ時過ニ起、阿部右門来、暮五番打、昼頃去、かやずあミ、間ニせかれ素読、
- 4月15日 五ツ前ニ起、是日家内何茂宮腰江行、独留守、掃除等、かやず終日アミかひこ桑三度かけ等、
- 4月16日 五ツ時頃ニ起かやずあミ、
- 4月22日 五ツ時頃ニ起、かやすあミ、小学素一人、□□温習等、
- 4月23日 五ツ時頃ニ起、かやすあミ、
- 5月1日 五ツ時頃ニ起、庭廻り斎判江行、暫咄帰、かやすあミ、
- 5月4日 五ツ時頃ニ起、かやすあミ等、

これ以後はこの年は登場しないようである。

「かやすあみ」は、春の季節的な内職であったようだ。

養蚕については、次のような記述がある。

4月15日に、「かひこ桑三度かけ」等が登場する。同月19日にも同様の記事がある。

「十九日 □□頃ニ起、（破損につき判読不可）かひこ桑かけ等、是日も早朝より家内何茂桑摘ニ行」とあり、5月11日には、「かひこ棚取寄、組立指図」とある。同月25日には、「かひこ数読等」、同月27日には「かひこ目形懸等」とある。6月8日「五ツ時過ニ起、庭徘徊、斎判江行、暫咄帰、糸くり指図等」とあり、翌日は「五ツ時頃ニ起、朝半糸くり等」とあり、自分で半糸くりを行っている。7月には養蚕関係記事はないようだが、8月になると5日「五ツ時頃ニ起、小川来、糸口入頼置候を持参、咄、四ツ過ニ去」とあり、同月19日には「夕食中又小川誘ニ来、暫咄、連而才川組屋替屋江行、

糸口等詮義等」とある。糸をつくるまではでき、販売・納入までいったようだが、これが家計の補助になったかどうかはわからない。

加賀藩の国学者として著名な石黒嘉左衛門（千尋）は、養蚕の奨励に力を入れた。その著『養蚕規範』が書かれたのは、この年の閏8月である。豫卿はそれ以前に家族をリードして養蚕に着手している。成果が挙げたかどうかはともかく、このような面でも豫卿は先進的であったといえよう。

頼母子

6月の下旬になると頼母子の記事が急に登場するようになる。6月21日「五ツ時頃二起、終日頼母子帳しらべ等」が、この年の起止録での初出である。現代では頼母子のやりかたを知っている人は少ないと思われるので、簡単に説明すると、以下の通りである。

仲間数名が毎月定額を出資し、1年後には全員がそれぞれの12ヶ月分の出資金をもらうというのが基本である。例えば、毎月3万円ずつ出し、1年後には全員が36万円を手にするという事が基本である。しかし、早期にそれに近い額がどうしても必要な人は、少し割り引いた額で早い月に入札し、一番割り引いた人がその額を手にする（最低額、例えば34万円、32万円、30万円と入札した人がいた場合30万円を入札した人がその金額を受け取れる）が、最終的にはその差額6万円はその落札した人が補わなければならない。最終日までの入金の方法には様々な方法があり、それは事前の規約で全員が了解している。緊急に資金が入用であり、低額で落札する人がいればいるほど出資者はそれぞれの月に決まった出資額より低い額を納入すればよいことになり、しかも最終的にはこの場合ならば36万円を手にするのである。この場合、途中落札者が最後まで出資しなかったり、差額を払えなかったりした場合が大いにありうるが、その場合は講元が責任を負うことになる。したがって、講元には信用のある人物がならないと、出資者が集まらない。構成員に資金繰りに信頼できない人物がいても困る。こういう構造になっている。こういう場合、「同じ」あるいは「近い身分」で生活、仕事上行き来が頻繁なものの中でやれば、信頼性が高く安全だったといえよう。藩では過去何回か頼母子を禁ずる令を通知したが、この頃は生活の窮迫から、容認していたということであろうと思われる（富山藩では、頼母子を容認し、その役銀を徴収して藩財政に役立てていたという。高瀬保『加賀藩流通史の研究』666p参照）。

この年の起止録から頼母子関連の記事を抜書きすると、

6月23日 五ツ時頃二起、朝半日頼母子案内小紙調、

同 25日 越久江一寸寄、頼母子会言付、

同 30日 （晦日）五ツ時頃二起、娘兩人麻疹、上田玄伯一寸来去、頼母子帳面しらべ等、

7月1日 （朔日）所々方頼母子懸銀中勘為持越二付返書等、・・・越久亭江行是日せかれも同道いたし罷越事、頼母子会夜四ツ時頃二済、帰、寝、

同 2日 森嶋方頼母子二付紙面到来、返書等、圪橋来、暫咄去、眠、湯あみ、小川来、暫咄、永井も一寸来去、晩方尾山屋跡江猪俣久米五郎頼母子会二行、仕法附入札等、夜四ツ時頃二帰、モ寝、

- 同 7 日 終日頼母子井上納入払帳しらべ等、
- 同 8 日 頼母子入札調筆等・・・直ニ本光寺江行、同所□□□頼母子会済居、和尚与暫咄・・・
晩方小松屋向御坊、井口誠士郎頼母子会ニ行、夜四ツ時前ニ帰、モ寝、
- 同 9 日 圀橋方頼母子会、夜五ツ時頃ニ帰、
- 同 10 日 終日頼母子寄銀等しらべ等、
- 同 11 日 永井誘連而十間町卯辰屋江山十頼母子会ニ行、
- 同 13 日 端丈吉、梅村頼母子寄銀、夫々しらべ手取高吟味受取、
- 同 14 日 中村四郎兵衛江頼母子寄銀遣シ、
- 同 20 日 不快、五ツ過ニ起、中村四郎参ル、紙面遣、頼母子帳取寄等、是日病人多ニ付、
寄相止、
- 同 28 日 大島頼母子式番会帳面調手伝等、仕法極、馳走、余江落札、夜四ツ半頃ニ帰、寝、
- 8 月 1 日 頼母子入札夫々調上ヶ等、
- 12 月 4 日 昼後頼母子会触紙面等調等、
- 同 5 日 森嶋、猪俣江頼母子会触紙面、
- 同 6 日 三吉ニ頼母子会触為持遣等、

引用文中の「越久」「越久亭」や「卯辰屋」(十間町)、「尾山屋跡」、「小松屋向御坊」などは、会場となった(小)料理屋と思われる。豫卿の菩提寺の本光寺も会場になっている。この年の頼母子の主催者は、豫卿、森嶋、猪俣久米五郎、井口誠士郎、圀橋、端丈吉、中村四郎兵衛、大島が確認され、多くの中下級武士がなっていたと考えられる。

頼母子の記事が6月下旬から7月と12月に集中するのは、7月と12月につけの支払い(7月は役銀納入も『起止録、安政2解説』24p参照)が集中するからで、少なくとも幕末の困窮していた下級武士にとって、これらの月はやりくり算用に四苦八苦する状況だった。したがって、「武士に算用は不要」というような教訓は、少なくとも下級武士には全く実行されていない。7月は家計の始末・算段に追われている。したがって、豫卿も若い一時期算盤の自習を熱心に行っていた。この年の起止録からも常に家計の収支に注意をはらい、頼母子の掛け金等の計算をしているのが分かる。下級武士は算盤勘定ができなければ生きてゆけない実態が分かる。

同姓会

5月24日に「同姓会之廻状到来下書等」との記事があるのが同姓会の初出であろう。5月28日に初回が行われる。「同姓九軒揃咄、後会相談等、是日亭主方人々江一汁一菜賄、取肴鯛さしみ、酒式三行、口取、客□御□ナリ、後会方八日定日ニして弁当持寄候事ニ極ル」とある。6月8日には決めたとおり、「弁当為持中藤江行、同姓会庄蔵、十三郎、守人、小太郎、久太郎五人行あり、壮三郎、余一集ニ罷通り、跡方四郎兵衛来、色々咄、夜六ツ時過ニ帰」と中村藤太郎の家で行われた。この同姓会がどの範囲の同姓に呼びかけたのか分からない。数多い中村姓の武士のなかで、中級武士が中心になっている事は、

初期の会場からも推測できるが、このような会の発足が主として何のためだったのかも今のところはっきりしない（ただし、近い親戚関係者がほとんどであるようだ）。もちろん、情報交換や相互扶助の意味があった事は明らかであるが。なお、参加者で与力身分が豫卿のみであったらしい事がまた不思議である。

8 おわりに

文久2年の起止録は、記述が乱雑で読みにくく、破損箇所も多い。また、綴じ目と記述が重なり、判読できない部分も多かった。この保存状態自体が時代の下級武士の生活状況を表しているようにも思える。ともあれ、原史料の状態が悪いため誤読も多かろう。

原史料は2008年秋、中村夏栄氏が金沢市立玉川図書館近世史料館に寄贈された。

なお、今回は文久2年の分の一日ごとの内容の要約を行ってみた。それは、大事な事を取り上げるといよりは、起止録全体にどのような事がどのような形で書かれているのかがつかめることを期待したのである。また、難解な翻刻文を読む際、解読の助けになることを心がけた。人名の略称が多く、分かりにくい事は言うまでもないが、これまでのものを含めた人名一覧等を参照するとかなり分かってくるはずと思う。

登場人物一覧

注

- 1) 前回までの解説でとりあげた人物は、原則として省いた。ただし、訂正を含め重要な事実が得られたため、再掲したことがある（板坂二郎大夫、岡本三郎太夫、小川平太郎など）。
- 2) 前回までの一覧と矛盾する、あるいは相違する説明がある場合がある。一々注記しないが、今回の説明がより正確である。
- 3) 今回は、少しでも解説がしやすくなる事を期待して、つとめて登場人物の文久2年当時の年齢を表記した。
- 4) 日記の原文中に太字になっているのは、この文久2年の「登場人物一覧」に載っている事を示している。
なお、太字になっていなくても、「安政2年登場人物一覧」「嘉永2年登場人物一覧」にあるものも多い。
- 5) 依拠した主要な史料は、関係する由緒書、士帳、加賀藩組分侍帳、総与力、与力屋敷などの史料である。
すべて金沢市立玉川図書館近世史料館の所蔵である。

あ

- 青木多聞 組外・奥泉新六の次男。本組与力・青木敬次郎の末期養子。70石。安政6.11公事場付御用加入。同7.2江戸近海異国船御手当御少将頭御用。文久元10公事場付御用加入帰役。文久2年当時34歳。
- 有岡久米人 小立野与力町の住人、中村豫卿家の並び宝円寺寄り3軒目。横山又五郎与力・有岡小右衛門の養子。安政4.9国学御内用向書写方御用。文久2.6.6相続、100石。同年11月公事場付御用加入、元治元年、定役。文久2年当時33歳。兄は今枝内記与力で200石の佐藤儀左衛門元幹（同じく小立野与力町の住人）。

い

- 五十嵐辰次郎 本組与力、130石。文久2年当時46歳。11月14日公事場で豫卿が主付で裁いた。
- 生山頼太郎 小立野与力町の住人、130石。豫卿の向かいに住む。文久2.9.13公事場付御用加入になる。
- 磯部他次郎 安政3.3.7～公事場検使方与力、この時24歳。
- 井誠→井口誠士郎 小立野与力町の住人。『起止録』安政2年登場人物一覧参照。
- 板坂二郎大夫 130石、組外、嘉永元年7月相続。父は植松平左衛門嫡子。御弓矢奉行。
文久2年当時57歳。田町（現田井町）に居住した。隠居後、寛窓。
- 一色覚右衛門 嘉永5年に流刑者となった馬廻・一色源五右衛門の子。明倫堂助教（加入）組外。
文久2年当時51歳。
- 逸次郎→多田逸次郎 『起止録』安政2年登場人物一覧参照。
- 市川承之助 由緒書の残る市川知行の事と思われる。市川知行は安政7年1月算用者、同年11月公事場留書加入、文久元年8月に同定役となっている。

う

上田玄伯 医師 解説 6 参照

右門→阿部右門 『起止録』嘉永 2 年登場人物一覧参照。

え

遠源 任田（とうだ）源蔵か？『起止録』嘉永 2 年登場人物一覧参照。

お

お覚 豫卿の 2 番目の娘。この年の 10 月 3 日病死した。当該日の日記本文及び解説参照。

お貞ま 親友、大島稼亭の妻。豫卿の妻の実姉妹。

奥山吉左衛門 小立野与力町の住人、中村豫卿家の斜め向かい。品川左門与力 100 石、奥山源吾の相続者と思われる。

長屋勘左衛門 小立野与力町居住。篠原織部与力 130 石、文政 9 年召抱。公事場付御用加入など。文久 2 年当時 60 歳。

岡三→岡本三郎太夫

岡本→岡本三郎太夫

岡本三郎太夫 小立野与力町の住人、経王寺横に居住。成瀬内蔵助与力・武貞助の次男。天保 2 年岡本平八娘に婿養子。天保 7. 2 九里歩与力 90 石召出し。次男は、文久 2. 3. 2（豫卿の再役就任の少し前）に公事場付御用当分加入となった細野潤次郎。弘化 3 年まで公事場勤務。嘉永 7. 8. 24～寺社方取次ぎ与力明知代官宗門方兼帯。文久 3. 12 に 30 石引足。120 石。文久 2 年当時 53 歳。

小川→小川平七（太？）郎

小川権之助 火矢方。70 石、嘉永 5. 12. 11 家督相続。土取場に居住。文久 2 年当時 33 歳。

小川平七（太？）郎 小立野与力町の住人。『起止録』安政 2 年図 3 の小川平太郎は、平七郎の誤りか。謡を愛好し、豫卿とよく謡っている。

か

笠間 多賀数馬与力 100 石の笠間角之助か？

神戸八郎大夫 組外御用番支配。130 石。文久 2 年当時 85 歳に達している。

き

北川七十郎 小立野与力町の住人。180 石、横山遠江守与力・北川彦七婿養子。文久 2. 6 相続、組外・小笠原祖山の四男。与力の親戚多し。

木下太郎 木下平之介の嫡子

木平→木下平之介 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

こ

近藤綱（綱）作 小立野与力町の住人。豫卿の一軒隔てた斜め向かいの位置。公事場の年下の同僚。前田主膳与力近藤右内の三男。天保 10. 11 定番御徒。安政 3. 7 父右内（組外 100 石となる）の名跡相続。150 石。妻は本組与力井口鍼太郎の 2 番目娘。兄、近藤誉吉郎は、元治元年 7 月新知 100 石組外。文久 2 年当時 27 歳。

桑島→桑島安左衛門と思われる。

桑島安左衛門 本組与力、養子、養父は桑島三左衛門。120 石。天保 12.12.11 相続。文久 2 年当時 47 歳。

小太郎→豫卿の従弟。中村小太郎 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

さ

斎左→斎藤左次馬

斎津→斎藤津左衛門

斎藤左次馬 本組与力、200 石。文政 3 年盗賊改方当分加入。文久 2 年当時 62 歳。

斎田甚八郎 定番御徒・岡喜右衛門の次男。明組与力・斎田七郎の末期婿養子。100 石。妻は豫卿の同僚・中西惣右衛門の妹。文久 2 年当時 67 歳。

斎藤津左衛門 隣家・斎藤判太夫の嫡子。この年の 5.2 江戸より帰る。

坂井仙之丞 小立野与力町の住人。豫卿の家の東南方向並び。奥村助右衛門（栄通、八家 17000 石）与力。180 石。天保 7.4.28 相続。天保 12.9.21～公事場付御用加入、その後定役。文久 2 年当時 44 歳。

酒井知大夫 横山政次郎与力、100 石。天保 12.12 召出。文久 2 年当時 53 歳。この年 11.14 公事場で裁かれた。

坂仙→坂井仙之丞

桜井彦太郎 小立野与力町の住人。本多主水与力、100 石。天保 11.8.11 召出。文久元 5 公事場付御用加入 同 3.12 定役。文久 2 年当時 39 歳。豫卿の公事場の同僚であるが、この年 8 月末に湯治のため湯涌温泉に行った。

佐藤多（他）作 山崎庄兵衛（人持、4500 石）家来給人の大塚躰無の三男。文政 7.7 今枝内記与力の佐藤瀬兵衛娘に婿養子。天保 2 年 150 石相続。天保 11 年今石動付与力当分加入など。文久元年 3 月に隠居。「元治元年与力町町内図」（『起止録』安政 2 年図 3）の佐藤清兵衛の父。

し

七郎左衛門→畑七郎左衛門

潤次郎→細野潤次郎

庄蔵→中村庄蔵

四郎兵衛→中村四郎兵衛 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

そ

壮三郎→中村莊三郎

た

高橋栄太郎 元町下代・高橋源左衛門の倅。安政元年、本町下代、安政 6 年御救方主任。文久 2 年当時 35 歳。

多田久太郎 頭並多田左守の嫡子。豫卿の妻の親戚。『起止録』安政 2 年、表 1 参照。

つ

津田平之丞 嘉永 5 年 8 月江戸にて家督相続。馬廻 400 石。文久 2 年当時 37 歳。11 月 14 日公事場で裁かれた。

て

寺西田宮 馬廻、180 石。味噌蔵町。安政 3 年相続。文久 2 年当時 36 歳。

と

友（子） 豫卿の長女。

友田 友田彦一と思われる。友田津左衛門の嫡子。聖堂（昌平坂学問所）に 3 年間行く。弘化 4.8 明倫堂句読師、同日校正方御用。嘉永元年訓蒙、同 2.12 訓導。長女は西坂成一郎の妻。

鳥山 小立野与力町の住人。大音帯刀与力 100 石の鳥山左吉と思われる。文久 2.9 養父重郎衛門 2 番目娘に婿末期養子となる。10.1 に相続祝いに行く記事がある。横山家家来給人・大味如漸の次男。文久 2 年当時 24 歳。

な

内藤誠左衛門 号、誠斎。横山遠江守与力 150 石の内藤忠作の嫡子。弘化元年与力に召出し。嘉永 2.7 公事場付御用。万延元年公事場御用再役。元治元年小川幸三等御糾一件御内密御用主付。慶応 3.4 卯辰山養生所主付、明治 2.3 理財局主付。同 3.3 公用人。明治 16 請われて福井で開塾。明治 26.5.15 没。70 歳。福井佐佳枝中町に称徳碑があるとの事。『卯辰山開拓録』の著者。

直三郎 中村直三郎。妻の里中村小太郎家の嫡子。

中四→中村四郎兵衛 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

中十→中村十三郎 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

中庄→中村庄蔵と思われる。

中壮→中村莊三郎と思われる。

中久→中村久太郎

中藤→中村藤太郎

中守→中村守人と思われる。

中村庄蔵 馬廻。中村弥平次男。嘉永 2.8 兄弥五左衛門の末期養子。嘉永 5.12.13 相続。文久 2.8.8 同姓会の会場となった。

中村莊三郎 組外。嘉永 4.3.4 新番より組替。御近習番 100 石。長町 2 に居住。弥五兵衛の次男、文久 2 年当時 67 歳。

中村藤太郎 万延元年 50 石、組外用番支配。文久元 2 組外、190 石。同姓会のメンバー。文久 2 年当時 23 歳。安政 2 年起止録の登場人物一覧に藤次郎としたのは誤り。

中村久太郎 300 石、馬廻り。文久 2 年当時 26 歳。中村駒之助の妾腹の子。小将町に居住。同姓会のメンバー。

中村守人 万延元年召出。文久初めは馬場 1 に居住。御異風。文久 2 年当時 39 歳。中村十三郎の弟。同姓会のメンバー。

長屋→長屋勘左衛門

長屋勘左衛門 小立野与力町の住人。篠原織部与力、130 石。文政 9. 5. 22 相続。天保 8. 2. 12 公事場付御用加入。天保 10 台所御用当分加入。文久 2 年当時 60 歳。

に

西坂善蔵 西坂成庵先生の兄。味噌蔵町に居住。天保元年御鉄砲細工所頭取。安政 5 年御鉄砲所総取締り。明治 5 年没。御能方御用も勤める。

西善→西坂善蔵

西谷大蔵 成瀬主税与力。100 石。文政 9. 2. 10 公事場付御用当分加入、その後跡算用関係仕事多数。天保 7. 9. 24 台所賄い方定（役？）加入。文久 2 年当時 60 歳。

丹羽慎之助 豫卿の親友、丹羽次郎兵衛の嫡子・丹羽基の幼名と思われる。

は

端 丈吉 医師 解説 6 参照

畑 七郎左衛門 小立野与力町の住人。この年 9 月下旬頃与力に召出されたい。

早浅→早川浅之丞

早川浅之丞 明組与力から本組与力。文化 12. 2. 13 召抱。文政 7. 11. 25 城付御用定役。180 石。万延元年から組外に列している。文久 2 年当時すでに 65 歳。慶応 3. 10 隠居。隠居名は浅休。

早川義三郎 80 石、文久 2 年当時 30 歳、嘉永 4. 3. 11～公事場留書御用算用者。

早川権大夫 小立野与力町の住人、豫卿の隣人。数馬の養父。150 石。

早権→早川権大夫

伴→伴 鉄五郎

判太夫→斉藤判太夫 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

伴 鉄五郎 130 石。横山山城守与力。嘉永元 8 兄左太夫の末期養子。嘉永 2. 4 公事場付御用、安政 4. 9 竹沢お屋敷一番組。文久 2 所口付き御用、また同年鉄砲所へ転役。文久 3 非人小屋裁許。文久 2 年当時 43 歳。

ひ

久太郎→中村久太郎

ふ

不破元太郎 組外、150 石。不破多蔵の嫡子。味噌蔵町に居住。文久 2 年当時 28 歳。この時、明倫堂句読師。文久 3 年同訓蒙加入。

不破→不破丈衛門

不破丈衛門 奥村源左衛門与力、200 石。末期婿養子。本組与力奥村彦助の次男。天保 8. 12 召出。小立野与力町の住人だが、江戸詰の役を多くつとめた。

へ

平左衛門→植松平左衛門 『起止録』安政 2 年解説参照。

ほ

細野潤次郎 九里歩与力岡本三郎太夫の次男。嘉永 6 細野治部左衛門娘に婿養子。文久
2.9.14 相続。同 3.2 公事場付御用当分加入、100 石。文久 2 年当時 26 歳。

堀 馬左衛門 小立野与力町の住人。安政 4.2.18～公事場検使方与力。

堀 昌庵 医師 解説 6 参照

ま

前田兵太郎 馬廻、前田脇五郎の嫡子。天保 14.12.8 相続。300 石。万延元年 12.6 表少将横目。

前兵→前田兵太郎

松五郎 斉藤松五郎 斉藤判太夫の子、斉藤津左衛門の弟。

む

村宇→村田宇左衛門 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

も

毛利（茂）→毛利茂八郎 『起止録』安政 2 年登場人物一覧参照。

や

八十島権三郎（^{しょうあん}祥安） 医師 解説 6 参照

山伝→山本伝太郎 『起止録』嘉永 2 年登場人物一覧参照。

ゆ

湯原平太夫 120 石、定番馬廻湯原沖衛門の嫡孫。婿養子。文政 10.12.13 跡目相続。文久 2.7
加増 50 石。豫卿の祖母の親戚筋にあたる。

小立野與力町図
(寺尾氏画)

- 1 文久一年の起録に当主が登場している家は姓を緑でぬる（不確定な場合はかこ）
- 2 文久二年当時の公事場の同僚は姓名どとも緑でぬる
- 3 文久一年から与力町の住人になつたと推定される人物は姓の上に△印をつけた
- 4 特に親しく付き合つた斎藤判太夫家は緑の丸で囲んだ
- 5 文久一年次、起止録に登場しない人物、あるいは世代交代があつたと思はれる家は姓を黄色でぬつた
- 6 ○印は他組と思はれる



文久2年起止録年表

月日	記事	社会・政治背景
1月15日		坂下門外の変
3月		この頃彦三八番丁に種痘所（反求社）を設ける
3月13日		世子・慶寧、江戸に出発
3月28日	午前10時頃公事場付き御用定役再役の通知、公事場出勤、関係者へ回礼。	
3月29日	公事場の勤務関係書類読みなど。	
4月2日	公事場付き御用定役任命。座列は内藤誠左衛門の次。ただし、検使御用指除。	
4月3日	昼から出かけ、一旦帰宅後従弟宅の祭に行く。	
4月4日	午前中は隣家斉藤判太夫と謡。夕方せがれ連れて入浴。	斉泰金沢に向かい江戸を出発
4月5日	豫卿の家が「役寄の宿」となる。12時頃より同役大勢来客。	
4月6日	公事場に出勤。夜中まで仕事。	
4月7日	豫卿の家の二階で祭、関係者多数来訪。	
4月8日	8時頃起き御触留をして10時頃出勤。午後は親友の大島のところへ行く。	
4月9日	昼、大島の妻（豫卿の妻の姉妹）が来て、その跡大島へ行く。夕方は隣家斉藤の祭に参加。	
4月10日	10時頃植松が来て話、碁3番打つ。夕方から毛利宅で碁会があった。	
4月11日	8時頃起き、小川が来る。せがれの素読指導。泊まっていたおばが帰る。2時過ぎから小川を誘い、多田、坂仙に行く。碁を打つ。	
4月12日	朝小川が来る。銭湯の後、2時頃から井口の妻「お脇ま」の件で関係方面に示談。お脇まが来て豫卿は12時前に寝たが、お脇まの帰ったのは夜中。	
4月13日	6時過ぎに起き出勤。3時頃済み帰る。夕方から同僚「山十」へゆき、囲碁。10時頃帰る。	この頃かやずあみの内職多し
4月14日	内職の合間にせがれの素読指導。畑に大豆の種を蒔かせる。	
4月15日	8時前起床。家族皆宮腰へ行く。一人で留守番。掃除や内職のかやずあみを終日する。	
4月16日	8時頃起き、内職の「かやずあみ」。午後菩提寺本行寺の和尚が来て碁を8番打つ。夜は永井の家で謡。	
4月17日	午前内職。4時過ぎから妻の里（味噌蔵町）と同町の孝友堂へ行く。	藩主・斉泰、金沢に入る
4月18日	6時過ぎに起きて出勤。夕方から浅野川うぐい（川魚）のいる瀬のところに行く。うぐい振る舞いに逢う。	
4月19日	前日同様、一家で桑摘みに行く。	
4月20日	かいこの桑掛け等。同僚と謡。磯野へ行き、4時頃帰る。夜岡三へ行き又謡。	
4月21日	午前、かやずあみの内職。隣家の斉藤判太夫などと謡。斉藤家で御馳走になる。	諸士の困窮を救うため貸銀をおこなう事を告げる
4月22日	午前、かやずあみの内職。息子を医者（上田玄伯）に連れて行く。夕方友人数人がきて謡。	
4月23日	かやずあみの内職、天神町米問屋に行く。	
4月24日	近所の米屋を廻り、堂形米を5斗手形で買う。	
4月25日	天神講満会で「岡三」に行く。その後、そこへ同僚続々集まる。	
4月26日	6時過ぎに起き出勤。午後3時頃に役目終了。晩から数人来る。10時頃皆帰る。	
4月27日	北川と小川を誘い山代温泉に旅行出発。山代温泉に泊まる。	
4月28日	6時過ぎ起床。山代温泉見物。昼頃宿に帰り、昼食後入浴。昼寝後また入浴。蕎麦を食べ10時頃寝る。	
4月29日	朝湯に入り、動橋、浅井堰、小松等を経て夜10時頃に帰宅。	
4月30日	10時頃起床。昼後午睡。西坂善蔵のところへ好文園（西坂辰之助）の七回忌茶の湯に行く。	
5月1日	内職、起止録執筆、触留など。夕方から、小川に行き仲間と謡。	
5月2日	6時頃起き出勤。3時頃帰る。隣家の斉藤津左衛門（斉藤判太夫嫡子）江戸から帰り、斉藤家に行く。	
5月3日	午前中は、まきの処理。夕方から小川のところで謡。	
5月4日	内職、質物取り替え、菖蒲風呂に入る。土塀の屋根修理。	
5月5日	家事を色々する。3時頃より「斉左」へ行き仲間と謡。	
5月6日	6時過ぎに起き、出勤。10時過ぎに終わる。隣家の早川の三回忌法事に参加。	
5月7日	午後小学の素読指導一人。せがれ復習指導。夕方近く「斉左」から呼びにきて仲間と謡。	
5月8日	半日入払帳調べ。午後、妻が本光寺参詣。隣家斉判で将棋2番皆勝つ。晩に多田へ行き謡仲間と謡。11時過ぎ帰る。	
5月9日	夕方多田（逸）へ行き、謡。帰宅は夜中。	
5月10日	午後、大島と犀川銭屋清兵衛の蚕室見学。	
5月11日	午後、蚕棚取り寄せ組み立て。	

月日	記事	社会・政治背景
5月12日	午前、勤め方帳調べ等。昼小学の素読指導一人。せがれ復習指導。夕方七黒より人が来て「こほうすぐり草取」。	
5月13日	6時頃起き、出勤。2時頃終わり、親友丹羽に寄り、屏風張り替えの手伝いはじめる。	
5月14日	午前、甚左衛門に柚の木接ぎ木させる。せがれの温習。七黒村より人がき、「こほうすぐり草取」など。	
5月15日	午前は家事指図など。午後、丹羽に行き屏風張り替え手伝い。	
5月16日	昼まで勤め方帳調べ等。昼寝。	
5月17日	町内から味噌蔵町、本光寺などあちこちまわり、春日神社へ行き謡。	
5月18日	公事場で奥州菊本某の「主付き」として取り調べ。	
5月19日	午前、入払い帳調べ、起止録書く。昼後小学の素読指導一人。せがれ復習指導。	
5月20日	出勤。先生ほか数名と会合。謡など。8時過ぎ帰宅。	この頃から金沢に麻疹流行
5月21日	(前半判読不可) 夕方から10時頃まで謡。	
5月22日	(破損につき判読不可)	
5月23日	不時出勤。帰ってから26日の祭の食材料など依頼。	
5月24日	同姓会をはじめの回状到来。入払帳調べ。	
5月25日	佐野屋に出す書面を書く。明日の来客の準備。蚕の数を数える。	
5月26日	家族などに来客準備言い付けてから出勤。棒稽古。昼後同僚続々来る。夕方6時皆帰る。	
5月27日	庭徘徊、朝寝。昼からせがれ温習。夕方から又友人数人来て謡など。	
5月28日	起止録を書く。昼後、小学素読・せがれ温習。同姓会をはじめて開会。同姓9軒揃う。	
5月29日	届いた「廻状」について植松と相談。昼後謡。間に日本絵図帳を見物。	
6月1日	昼から斉判連れて多田へ行き謡祝言共10番。	
6月2日	出勤。処理件数多く夕方6時頃までかかる。	
6月3日	役所で事務処理の後「御土蔵見物」。	
6月4日	江戸詰めの件で植松に相談する。その後基を4番。昼頃風呂に行く。帰ると自宅に数名続々来客、基を打つ。	士風の懦弱を戒める親翰発せられる
6月5日	午前中は隣家の斉藤家父子と謡。夕方から斉判と多田へゆき謡。	
6月6日	出勤、職務多忙。北川七十郎相続祝いに行き小謡。	
6月7日	土田の依頼で『兼山秘策』を調べる。出勤。妻は夜8時頃帰る。	
6月8日	弁当持参で「中藤」で同姓会。色々話す。	
6月9日	朝半日糸繰り。午後会所へ「仕切役銀上納」頼みに行く。	
6月10日	昼前に眠り、午後も眠る。夜小川へ行き長談。	
6月11日	家計の調べ。夕方に孝友堂先生(西坂成庵)が来て咄。	
6月12日	せがれの復習指導。同僚、友人数名来訪。	
6月13日	出勤。奉行も出座。相変わらず事件多く、6時頃帰る。	
6月14日	朝、虫歯のまじないをする。午後お定書調べる。大島など来て将棋。	
6月15日	午前、同僚後輩青木の相談にのり、後で囲碁。妻など留守、夜10時頃帰る。	
6月16日	午前、斉藤の長男が来て謡。近藤網作が来て江戸詰めの相談。	
6月17日	出勤前に一仕事、同役打ち合わせ日。昼に終わり、本光寺参詣。屋根方与三次に寄る。その後謡会。	
6月18日	出勤。吟味もの3人。夕方多田など来て謡10時頃まで。	
6月19日	午前中読書等。昼後家計思案。夕方、斉判と「岡三」へ行き謡。	壮猶館に射的場を設ける
6月20日	午前庭徘徊など。昼寝。夕方同僚の寄日で脇坂へ行く。	
6月21日	終日頼母子帳調べなど、夕方入浴その後斉藤嫡子と謡。その後斉藤嫡子が来て又謡。	
6月22日	青木多聞来て江戸詰めの件聞き合わせ、その後基4番。	
6月23日	午前、半日頼母子案内作成。夕方から斉判へゆき、謡会、10時頃帰る。	
6月24日	この日から土用稽古謡、また土用見回りをする。	
6月25日	午前数人と自宅で謡、昼から土用回礼。帰宅後湯浴み、庭を徘徊。	
6月26日	謡を少ししてから出勤、吟味もの4件、2時過ぎに帰る。近所の土用回礼。	
6月27日	7時頃起き、水野金大夫の件で斉判に行く、土用回礼。	
6月28日	板坂が来て井口の件で相談。土用回礼。	
6月29日	あちこち訪問、妹の三十三回忌。夜6時前本光寺から僧侶が来て読経。	
6月30日	娘二人とも麻疹に。上田玄伯一寸来る。昼寝、午後は外出。	
7月1日	漢文の訓点つけを頼まれ、午後3時頃までかかる。越久で頼母子会、せがれも同道。	
7月2日	出勤日、公事場奥で執行された斬罪を見物。午後頼母子の返書。晩から頼母子出席。	
7月3日	家計の調べ、昼寝、また家計算段。夜隣家斉判来る。	
7月4日	堀、小川の三男など(麻疹?)見舞。帰り隣家斉判へ、午後昼寝。夜また斉判へ。	
7月5日	上納金調べ、本光寺上人来宅。頼母子入銀調べ。3時頃髪結い。	
7月6日	中惣迎えにきて一緒に出勤。吟味もの4人。桜井、磯部と堀の見舞いに行く。夕方、隣家遠田で頼母子寄銀調べなど。	

月日	記事	社会・政治背景
7月7日	終日頼母子並びに上納入払帳調べ。間に昼寝、入浴。	
7月8日	早権へ麻疹見舞い。土用見回残りをまわる。夜は井口頼母子会に参加。	
7月9日	齊判に行くが来客で帰る。入り払い帳調べ。従弟小太郎方の頼母子会参加。	
7月10日	「切籠」調筆など。終日頼母子寄銀調べ。この日せがれ麻疹。	
7月11日	頼母子寄銀調べなど。十間町卯辰屋山十の頼母子会参加。	
7月12日	終日入払帳書き込み。借金支払い、「つけ」をそれぞれ支払い。	
7月13日	野代屋に寄り印紙を買ってから出勤。帰りに数件用事で寄る。夜、端丈吉（医師）、梅村（弟子）の頼母子寄銀をそれぞれ計算、受け取りなど。	
7月14日	中村四郎兵衛に頼母子寄銀送り、夜までに支払い方面それぞれ対応。	
7月15日	終日跡算用。触留など。	
7月16日	昼から本光寺へ参詣。風邪気味で早く寝る。	
7月17日	同僚寄り合いの日、西坂先生麻疹で見舞い。植松、板坂の二人が来て井口佐太右衛門の件で相談。	
7月18日	5時半過ぎに起床、出勤日。6時集合、刑法もの17件、午後ためしもの17件、夕方風邪で寝る。頼んでおいた「豆口」がくる。	
7月19日	終日不快で寝る。夜「一時上納（猶予？）願」紙面を書く。	
7月20日	不快、この日不調のもの多く、同姓会中止。「一時返上（猶予？）」紙面届く。	
7月21日	病全快、家計検討。商人が来て井口方入用の古手もの買い上げ。	
7月22日	孝友堂先生（西坂成庵）見舞に行く。井口の事で同家中のものを訪ねる。	
7月23日	多田逸次郎はしか見舞、土屋九内へ梅やみに行く。	
7月24日	従弟、小太郎若殿様（慶寧）御近習任命される。書類手伝い。	
7月25日	8時頃起きる。掛け物片付け等。朝齊判に行き昼前に帰り午睡。午後3時過ぎ近藤に行き、碁6番。	
7月26日	役所出勤日、同僚脇坂・磯部に検使命令。従弟井佐から手紙、口頭で答える。	
7月27日	板坂と井佐へゆき買い整えたものの渡す。先生（西坂成庵）の危篤の知らせ、世話を頼まれゆき夕方帰る。	
7月28日	午前中少々不快で眠る。大島で頼母子会、自分が落札。深夜帰る。	
7月29日	朝不快で寝る。昼後井口の火事羽織を持参。	
8月1日	井口の勝手方帳面調べ、頼母子入札調べ。午後は片付け、夜中惣へ行き、明日役所「連参」（遅刻？）のことを伝えてもらう。	
8月2日	西坂先生の葬儀、夕方大島家で着替え役所に出勤。奉行の妻病死の悔やみに行く。	小川幸三、藩侯に直接上洛を説く
8月3日	午前「書物さらし」など、読書。夕方蠟燭を買い、西坂家に行き、西坂先生の「中陰速夜」の件で話す。	
8月4日	『御夜話』全読、晩から堀へ見舞い、毛利茂八郎の家で話し、夜中に帰る。	
8月5日	終日書物の整理。晩から妻永井に行き、蚊帳つり子ども寝かせる。	
8月6日	出勤日、夕方帰る。親友丹羽にゆき夜8時頃帰る。	
8月7日	隣家齊判奥さん病気で見舞い。昼前より終日書物曝しなど。	
8月8日	髪結い昼寝、湯浴み、夕方から長町式番町中村庄蔵宅で同姓会。	
8月9日	朝飯後、米屋次兵衛が来て米屋に呉服を売る。その後碁7番。午後従弟小太郎が来て、系図など相談。夜、丹羽も来る。	
8月10日	朝入払い帳調べ、井口方の帳面調べなど、昼後去年からの触れ仮写しの分を清書。	
8月11日	終日御触留清書、晩までにすべて終了。その間齊判屢々来る。	
8月12日	終日御触留帳とじ直しなど。夕方から大島、多田、小川が来て夜中近くまで話す。	
8月13日	出勤、「奥妙寸甫」の事件夜中まで磯野主付き事件の調書調筆手伝い。	
8月14日	夜中に帰り昼まで寝る。同僚中西の母大病の見舞い。	
8月15日	出勤。大島、丹羽、小太郎が来て「明月大豆」を振る舞う。	
8月16日	朝、つる大豆収穫、昼寝、入浴。晩から木下へ行き将棋を5,6番うち夜中に帰る。	
8月17日	出勤。早く終わる。湯原平大夫の加増（120石→170石）の祝儀に行くが留守。本光寺参詣後、春日神社で謡4番謡う。	
8月18日	出勤。牢屋の改善について連名の要望書あり。永井に寄り（その咄をし？）帰り寝る。	
8月19日	朝から昼屋来、指図、夕食中小川誘いに来、一緒に「才川組屋替屋」にゆき「糸口」など詮議。夜、松山蕎麦店で蕎麦を打たせる。	(8月中金沢でコレラ流行)
8月20日	朝、永井、中惣へゆき帰り、終日昼屋の指図、晩に昼屋に一杯飲ませ話す。	
8月21日	植松に行き、家族留守のところ和学書を読み、亭主と碁3番、ほかにも2人来て、途中家へ帰るがまた植松へ行く。8時頃帰宅。	
8月22日	朝味噌蔵町丹羽にゆき上納の事頼み、従弟小太郎にゆき、昼後近藤綱作に砂糖壺の制作依頼に行く。	
8月23日	朝、家族で白大豆8粒、黒大豆8粒煎り出し全員で飲む。この日、湯茶煙草等一切禁制のデマが流布。昼寝、障子張り等。	

月日	記事	社会・政治背景
8月24日	御触留帳15冊下仕立て、堀馬左衛門幼児（娘）病死で届けの書類の相談にのる。晩から木下平之介に行く。夜中まで大島と将棋。	
8月25日	朝、障子張り、祭のため、親戚縁者集まる。親戚の女性2名宿泊。	勤王志士小川幸三、郡奉行に藩侯上洛の必要を上書
8月26日	出勤、深夜1時頃帰る。一杯のみ寝る。	
8月27日	七黒村五郎右衛門来る。自宅の障子張りなど。	小川幸三の上書を年寄りに見せる
8月28日	この朝下痢気味。出勤。従兄弟の井口佐太右衛門の咎め許しで留守番。	
8月29日	下痢が激しくなる。トイレ7,8度。きのご採りの約束したが、皆体調悪く中止。その後トイレ12,3度。	
8月30日	下痢が続く、トイレ12,3度、夕方従兄弟井佐来る。	
閏8月1日	下痢漸く治まる。井佐が来て障子張り手伝う。	
閏8月2日	出勤、公事場奉行多田殿に悔やみに行く。	齊素、小川幸三の咄を聴く
閏8月3日	昼前に出勤。弟子の浦野庄兵衛病死、悔やみに行く。午後障子張り。夕方大島と丹羽に行くと従弟小太郎も来ていた。旧友「山余」もきた。夜9時頃帰る。	
閏8月4日	終日反古調べ。夜まで大島のところ、そこで入浴。将棋8番、深夜1時頃帰宅。	
閏8月5日	多田へ「ころり」の見舞い。従兄弟の井口佐太右衛門来て一日障子張り替え手伝い。	
閏8月6日	出勤。帰宅時大島へ寄る。この日は夜8時頃帰る。	
閏8月7日	大島、山十が来て、郊外の北袋（湯涌温泉入口付近）まできのご採り。その後湯涌温泉で入浴。帰りは暗くなり松明をともし、夜中に帰る。	
閏8月8日	朝10時頃に起きる。夕方から豫卿宅で同姓会、従弟小太郎は忌中で不参加。夜8時頃散会。	
閏8月9日	昼後、長屋の障子油引きなど。夕方、多田久太郎養母病死の悔やみに行く。夜御馳走になる。	
閏8月10日	与力町内見舞い等、昼後板坂二郎大夫へ井口の事で行く。	
閏8月11日	多田の30石引足知を祝いに行き、「普為紙面」作成手伝い。同僚数名も後から来て手伝い。夕方着替え皆で祝う。	
閏8月12日	蔵宿根縮状等書く。夕方、多田久太郎養母の中陰速夜に行く。	
閏8月13日	出勤、同僚ほとんど検使に出たので、代わりに割符所の中惣に応援頼む。この日筆筭番当分加人辻安兵衛に任命。	
閏8月14日	朝大工が来る。出勤。午後小川と毛利茂八郎に行き基など、齊藤も来て夜中まで話す。	
閏8月15日	午前庭木の植え替えや青草柴刈らせなど。午後から西坂先生中陰速夜に行く。高弟集まる。永山平太も来る。	
閏8月16日	午前入払帳調、検使留読み等。午後同僚植松の餞別料理詮議など。中惣へ行き夜遅く帰る。	
閏8月17日	学校へ出て孟子の講書聴聞、講師一色覚右衛門。その後出勤。この日新たに水野金大夫と生熊左源太が同役に任命。	
閏8月18日	出勤。水野金大夫この日同役となる。	
閏8月19日	午前道具片付け、午後忌中同僚見回り、この日から「お脇ま」手伝いに来る。	
閏8月20日	敷地屋が来、「米通」つけて渡す。昼過ぎから起止録を書き、上納方書物等色々調べる。午後から大島、毛利、道仙等来る。新任同僚の水野金大夫と生熊左源太が来る。	
閏8月21日	午前中調べものなど。昼後髪結い、永山に一寸寄りなど。晩に滝沢の所で植松餞別の御馳走に相伴する。	
閏8月22日	桜井彦太郎から頼まれた湯治関係書類草案を書く。朝湯に行く。風邪気で寝ていると水野が来て、色々質問、夜まで。	幕府参勤の制度を改める
閏8月23日	隣家遠田隠居ころり病死で行く。書類等手伝い。晩から永井に行き、植松の餞別の相手の咄等。	
閏8月24日	風邪で一旦起きるが又寝る。西坂先生の嫡子、西坂成一郎が挨拶に来る。	
閏8月25日	植松妻今朝ころり病死で手伝いの要請があり、風邪気を押して行く。植松の江戸詰めの予定変更の相談など。	
閏8月26日	風邪ようやく治り、出勤。豫卿、検使役を再び命ぜられる。青木多聞も来月4日より出勤。	
閏8月27日	10時頃出勤。午後同僚「山十」などで咄。夜中惣が来て夜中まで咄。	
閏8月28日	朝、眠気覚めず。不快、目薬つける。牢死者見届の命令が来て、書き付けを添え青木にまわす。夕方出勤、牢死見届け帰る。	
閏8月29日	又牢死見届け命令が来て、青木にまわし、昼後庭を散歩。夕方出勤、牢死見届け。その後すぐ従弟小太郎宅の長屋建前祝いに行く。	
9月1日	植松の亡妻の初七日に行く。	
9月2日	出勤。	
9月3日	朝起き（妻に）質札調べを言いつける。11時過ぎから出勤。5時過ぎ終了。帰りに丹羽、木下で祭に参加。	
9月4日	朝から妻里の祭で留守。質札調べ。午後妻の里の祭に参加。自分は一足先に帰宅。	
9月5日	同僚の寄日、豫卿宅で。晩に皆帰る。	

月日	記事	社会・政治背景
9月6日	出勤日、仕事多忙、山十、磯野が助力する。	
9月7日	朝6時頃公事場から帰り、寝る。	
9月8日	10時前から出勤。4時頃終わり丹羽に寄る。その後中久で同姓会に参加。	
9月9日	重陽の日なので、親友丹羽とせがれも連れて土清水を散歩。衣服改革の急回状届く。	諸士の服制を改める
9月10日	公事場に出るべきところ、風邪、頭痛で休む。妻子は観音院などへ参詣で留守。	参勤の制度の変更を家中に告げる
9月11日	不快で在宅、同僚桜井が来て問い合わせ。2人来客あるが不快で会わない。夜蕎麦を食べる。	
9月12日	先日豫卿が定役に推薦しておいた青木多聞定役を命ぜられたと報告に来る。	
9月13日	出勤、生山頼太郎同役加人を命ぜられる。帰宅後御触れ留め。生山頼太郎来る。	
9月14日	10時頃起きる。水野、生熊来て公事場関係の話。大野の作見屋が来宅。	
9月15日	丹羽、従弟誘い両家族連れて宮腰まで遊行、菊見物など。	
9月16日	朝、生山が来て仕事の相談。牢死見届けの仕事が来て生熊を連れて公事場に行く。	
9月17日	学校へ出て講書聴聞、その後出勤、本光寺参詣など。	
9月18日	出勤、吟味が難航、「再度糾す」。夕方頃漸く会得。	
9月19日	出勤、妻不在、子どもに絵を描いてやる。	
9月20日	坂井平六の新知50石祝いに行く。	
9月21日	庭のキノコむしり（みそがたけこぎ?）、午後、大野醤油屋が縁談の治定に来る。	
9月22日	会所に出て地回り会所金受け取り、人に依頼。	
9月23日	10時頃から友人、従弟と白山参詣に行く。	
9月24日	10時前に起き、髪結。昼後井佐と碁2番。夕方、江戸から帰った隣家斉判へ行く。	
9月25日	午前、午後とも職場の後輩職務の聞き合わせに来る。大野から御馳走が来る（婚姻の相談にのったお礼）。	
9月26日	近藤綱作に寄ってから出勤、「菊地屋おふ品」の事件解決、夕方から中惣へゆき仲間と鮭料理を食べる。	
9月27日	午前仕事関係、午後井佐来て話。起止録書く。夕方水野金大夫へ一寸行く。	斉泰、西洋の武器の採用と皇国の兵法の併存を論ず
9月28日	風邪気で昼頃まで寝る。午後岡検使の名書の件で節用を引く。夜、稼亭・斉判が来る。	
9月29日	風邪気で昼前まで寝る。「生熊」の家に同僚集まり岡検使。	
10月1日	8時頃起き、回状執筆。長女の友子に源氏温習させる。安倍病死。次女のお覚病気。	
10月2日	6時過ぎに起き、出勤。「お覚」の病気で「紫雪」買いに行く。医師の端丈吉来る。	
10月3日	夜中2時前にお覚病死。病死案内紙面など書く。親戚、友人詰める。	
10月4日	お覚の葬式用意など。8時頃入棺。人の出入り頻繁。	
10月5日	本光寺から僧が来て読経。山十に明日から出勤の書面書いてもらう。夕方おばば帰宅。	
10月6日	役所出勤予定だったが見合わせ、昼頃起きる。同僚聞き合わせなどに来る。	
10月7日	昼頃髪結い、本光寺に参詣。検使所の問い合わせの紙面が来て同僚と相談。	
10月8日	お覚の「中陰速夜」、斉判に行き火鉢を借りる。本光寺上人、僧など来る。	
10月9日	朝雪が降ったが、（豫卿は留守番で）その他の家内全員で本光寺参詣。（越中?）境関所の変死人の件で検使の桜井と打ち合わせ。せがれ連れ	
10月10日	医師上田玄伯へ。	
10月11日	8時頃起き入り払い調べ。炭が来る。せがれ疱瘡気味。	世子・慶寧、金沢に帰着
10月12日	朝4時前に起き、日吉大社へ参詣（せがれの疱瘡快癒祈願?）又寝る。昼過ぎ板坂が来て長談。医師2名往診、夜銭湯に行く。	
10月13日	久しぶりに出勤。同僚に挨拶まわり。起止録書き、入浴に行き寝る。	
10月14日	上田玄伯に息子の薬取りに行き、別の薬も買ってくる。夜、薬2回飲ませる。	
10月15日	医師の八十島権五郎の住所を聴き訪ねる。僧が来て二十七速夜の読経。（疱瘡除けのため）行灯に赤紙張る。検使命ぜられる。	
10月16日	夜中の2時頃起き、髪を結う。5時頃生熊と西町の検使宿に入る。死骸検分など。11時頃終わり帰る。医師2名往診。	
10月17日	出勤日。夜6時頃帰る。夕方小川が酒2升持参、話。12時過ぎに帰る。	
10月18日	8時前に起き早めに出勤。夜6時頃帰る。蕎麦食べ9時半頃に寝る。	
10月19日	起止録書き、お触れ留め。せがれ「差引」あり、看病など。	
10月20日	6時頃起き、上田玄伯に行くが体調悪く会えず。役所欠勤（せがれの病気対処のため）。せがれの薬等色々対処。寝てから又起き看病。	

月日	記事	社会・政治背景
10月21日	井佐が来たので高崎に行ってもら。医師高崎が来て診察。夜、八十島診察に来る。せがれ漸く快方に向かう。	
10月22日	青木紹介の医者岩崎某診察に来る。端丈吉も来て診察等。12時過ぎ起止録書き寝る。	
10月23日	午前10時頃起き、せがれに菓飲ませなど。夕方昨日生山頼太郎呼びに来たので行く。夜斉判で10時過ぎまで御馳走になる。	
10月24日	午後3時頃に起床。小川来て話、10時頃寝る。	
10月25日	8時頃起き、生山の弟が来て兄の勤務について聞き合わせ。今度は娘友子が発熱、看病。	
10月26日	役所欠勤届ける。八十島、端が来て子ども両方の診察、夜看病等。	
10月27日	隣家早川隠居見舞いに来る。午後起止録書く。明日進士に箕を借りる手紙を書く。	
10月28日	昼前に起き、堀昌庵に免眼水買いに行かせる。夕方八十島が来て「風呂ふき」（大根？）を出す。夜子どもたちの看病等。	
10月29日	8時頃起き、看病。夕方八十島が来て診察、暫く話す。	
11月1日	隣家、遠田奥様見舞いに来る。小川が来て話。せがれ「一番湯引き」髪結い。夕方役所に行き、牢死見届け。	
11月2日	6時頃起き、佐野屋への切手を書く。その後出勤。6時前に帰る。隣家の斉藤より息子松五郎の元服祝いの酒が届く	
11月3日	10時頃起き、看病など。午後磯部、斉判が来る。二人が帰った後毛利・中惣（酒持参）来る。その後も八十島含め来客。	
11月4日	9時頃起きる。風呂立て入浴。本光寺僧たちがきて読経、八十島が往診。10時過ぎ寝る。	
11月5日	午前髪結い、12時過ぎから内藤へ行く。寄日。4時頃終わり、香林坊の書店で子どもの絵本、教科書買物する。	
11月6日	6時過ぎに起き、出勤、5時頃帰る。山十、小川、斉判が来る。蕎麦振舞。12時頃皆帰る。	
11月7日	10時過ぎに起きる。二宮、有岡久米人が同僚に加わることになり、聞き合わせに来て昼頃去る。絵本読み等。	
11月8日	8時頃大工が来る。色々言いつける。夕方畑春斎が来て診察。	
11月9日	8時前に起き、堀大庵に行く。昼後有岡が来る。八十島、堀往診に来る。稼亭来る。	
11月10日	8時過ぎに起きる。小山良左衛門が来て診察。来客多し。夜七黒村五郎右衛門も来る。	領内の銭貨の交換比率を決める
11月11日	10時頃起きる。かぶと目懸等。大工が来て指図する。為替相場変わる。医者3人（堀、村崎、八十島）が来て診察。	
11月12日	10時前に起き桜井、二宮、有岡来て話。昼後も3人来る。晩に皆去る。夜銭湯に行く。	
11月13日	5時前に起き、6時出勤。馬廻、与力2人など審問、裁判があった。	
11月14日	夜なべで取り調べ書など清書。13日の裁判関係仕事。	
11月15日	13日の処分に立ち会い。罪人それぞれに連行。昼頃済み帰る。	
11月16日	昼前に起きる。同僚磯部他次郎「差し控え」の処分を受ける。	
11月17日	10時頃起きる。有岡、生熊来て昼後帰る。妻の里で甥直三郎髪置。夜10時頃帰る。	
11月18日	7時に起き、出勤。数軒訪問、夜10時頃帰り寝る。	
11月19日	昼前に起きる。作見屋来る。妻の里へ行き、夜中に帰る。	
11月20日	青木の家で同僚会合。（寄日）後で多くが残り話す。夜9時頃帰る。	
11月21日	10時前に起きる。団子を作る。午後隣家斉藤にゆき、熊煮を振る舞われる。夜銭湯。	
11月22日	10時頃起床。本光寺僧がきて四十九日読経、小川が来て夜12時頃までいる。	
11月23日	昼前に起きる。起止録書く。中惣伝授の小瘡まじない葉をつける。昼後髪結い寒見回り15軒。	
11月24日	9時頃起床。昼から同僚みな脇坂へゆき「岡検使」をする。晩からそこに辻安兵衛来る。	
11月25日	8時半頃起床。昼後植松の子ども病死の悔やみに行く。寒見回り9軒する。夜中2時頃妙立寺出火の噂、又眠り出勤、斬罪10人など。年寄、奉行出座。夜6時半頃帰宅。就寝後、中惣聞き合わせに来る。	妙立寺出火
11月27日	7時頃起きると、使いが来て検使命ぜられる。検使所の寺町承證寺へ3時頃行く。死骸検分、関係者事情聴取。	
11月28日	朝6時頃までに取り調べ書き上げ。2時頃すべて終わり検使所引き上げ。5時頃に帰宅。	
11月29日	7時起床。二宮、有岡来て聞き合わせ。妻、半日本光寺へ。夜帰る。	
11月30日	昼前に起きる。昼後、起止録や皆済状、検使留めを書く。夜8時過ぎに斉判来る。	
12月1日	10時過ぎに起きる。昼後髪結い。有岡、二宮が来て「聞き合わせ」方等相談。夕5時頃妻里へ行く。6時頃帰り、丹羽に行き、12時頃帰る。	
12月2日	朝6時過ぎに起き出勤。松本景斎など一件、夜6時までかかる。	
12月3日	10時過ぎ起床。勤方帳しらべ等。昼1時頃に伴が話しに来る。夕方まで。夜小川来る。	

月日	記事	社会・政治背景
12月4日	7時半頃起床。すす払い。昼後頼母子の紙面書く。斉藤奥様、ご新造様風呂に来る。夜、有岡来る。	
12月5日	10時過ぎに起床。端丈吉に薬札を持って行かせる。夜、出勤日変更の回状届く。	
12月6日	10時前に起床。三吉に頼母子触れ持って行かせる。謡クリ。	
12月7日	10時過ぎに起き、御触れ留め、昼頃から七黒村五郎右衛門来る。道仙来る。	
12月8日	午前、森嶋来る。終日検使留や入払帳調べ等。晩に起止録書く。	
12月9日	昼前に起きる。障子修繕等。3時頃坂宇、永井が来て話。夜、越久で頼母子会。	
12月10日	「できもの」で難儀、午後2時頃起きる。森嶋へ頼みあり、夜、蕎麦振舞われる。	
12月11日	昼前に起床。有岡、二宮が来て「聞き合わせ」方等相談。晩、山十で熊とナマズを振る舞われる。	
12月12日	6時過ぎに起き餅つき、隣家斉藤家から主人ほか息子3人手伝い。中惣の家来喜作も来て少し手伝う。5時頃終わる。7時頃、皆去る。	
12月13日	8時前に起床、遅刻を届け髪結い等。10時頃出勤、案件18件、夜12時過ぎまで後進の指導。	
12月14日	早朝6時帰宅、寝る。午後3時頃起床。山本伝太郎本宅に引越祝いに行く。夜8時過ぎ帰る。井佐が来ている。	
12月15日	9時過ぎ起き、遅刻届け、用事済ませ出勤。西坂成一郎の相続祝いに行く。7時頃帰り、妻の里に寄る。	
12月16日	出勤日だが、下痢気味で役所休む。昼頃起きる。起止録書く。小川など数軒訪ねる。10時過ぎに帰る。	
12月17日	8時過ぎ起き、髪結い、出勤。1時頃に終わり、稼亭に寄る。永井に寄り不在、後から永井自宅へ来る。	
12月18日	出勤日。棒稽古をする。2時頃済む。4時前中惣が誘いに来て一緒に長井(養)の稽古見舞いに行く。	
12月19日	6時過ぎに起き、出勤。吟味もの8組。夜8時過ぎ帰宅。一杯飲み寝る。	
12月20日	9時頃に起き、八十島に薬代持って行かせる。役所遅刻届け、昼頃より出勤。山十へ行き、連れて帰る。山十酔って泊まる。	
12月21日	9時頃起き、頼母子銀子調べ入札記帳等。昼後、有岡が来て岡検使書き付け一通書いてやる。夕5時頃永井が来る。	
12月22日	午前髪結い、終日頼母子入銀調べ等。夕5時頃外出、植松で基3番。12時前に帰る。	
12月23日	午前、有岡、小川、中惣など来る。夜明け前公事場に賊が入ったとの情報を聴く。2時頃より学校へ行き、山崎の稽古を見る。170人ほど出席。	
12月24日	午前、中惣、瀧沢へ行く。同僚と小川方鉄砲稽古所へゆき稽古、夜、植松等来る。	
12月25日	午前、森嶋少し来る。井佐、青木も来る。妻、本光寺へ参詣、5時頃帰る。10時過ぎ寝る。	
12月26日	6時に起き出勤。斬罪者5人、「ためし切り」もあった。4時過ぎに済み帰る。	
12月27日	8時過ぎ起床、来客多数。夜頼母子銀調べ等。	
12月28日	自宅で風呂立て入浴、障子修理等。近江町でするめ買わせる。同僚、磯野の御射手任命祝い、同僚、早川義三郎の加増を祝う。12時過ぎ帰り寝る。	
12月29日	終日支払い算段。七黒村の五郎助来て昼後帰る。大工来て話。畳屋俵が来て話。5時過ぎ中惣へ行き蕎麦振舞われる。その後夜明けまで数軒訪ねて夜明かし。	